

研究授業「演習Ⅳ」の実施報告

岡 本 丈 彦*

Report on an Open Class of “Practicum IV” :

Takehiko Okamoto

概要 :

本稿は、平成27年度第2回経営学部研究授業（「演習Ⅳ」）の実施報告である。本講義においては、学生に「卒業論文」の問題意識を持たせることを目標に、学生各自の興味のあるテーマで報告を行わせ、それに対して質疑応答を行った。

以下においては、本講義の概要ならびに研究授業に対する参観者からの意見、今後の教育上の課題について報告を行う。

キーワード：企業、経営、企業の国際化、国際展開、問題意識

(Abstract)

The purpose of this paper is to report on an open class “Practicum IV”, conducted in the Department of Business Administration at Takamatsu University on December 4, 2015.

In this practicum, the goal was to help students develop critical thinking skills in order to help them write a graduation thesis on a topic they are interested in, and there were questions and answers related this point.

Key words: Corporation, management, internationalization of companies, international expansion

* 提出年月日 2015年11月30日 高松大学経営学部講師

1. はじめに

本稿は、平成27年度12月4日（金）に高松大学経営学部経営学科において行われた研究授業の実施報告である。本学における研究授業は、教員の指導力ならびに授業方法の改善、学生の実態把握等を目的に、平成15年度より各学部・各学科単位で学期に一度の割合で実施されている。

2. 研究授業実施の日程

本研究授業ならびに検討会は、以下の日程で行われた。

(1) 研究授業

日時：平成27年12月4日（金）V校時

教室：本館403演習室

科目：演習Ⅳ（演習）

対象：経営学部経営学科3年生岡本ゼミ（学生5名）

担当：岡本 丈彦

参観教員数：経営学部経営学科教員10名

(2) 検討会

日時：平成27年12月4日（金）Ⅵ校時

教室：本館403演習室

参観教員数：経営学部経営学科教員10名

3. 「演習Ⅳ」の授業計画

まず、「演習Ⅳ」の①授業の紹介、②到達目標、③授業計画、そして、④授業時間外の学習について説明を行う¹。

①授業の紹介

「演習Ⅳ」では経営学の中でも、国際経営に関連する内容を講義する。学生は、国際経営に関連したいくつかのテーマについて、個人でまとめ資料を作成した上で報告を行う。この「演習Ⅳ」を通じて、学生個人が興味のあるテーマを掘り下げていくことを狙いとす

る。
本講義においては実践的、体系的な学びを通じて、企業や経営、社会、そして、グローバル化に対する理解を深めることも併せて目標としている。

②到達目標

本演習においては、国際経営（グローバル経営）に関連するテーマについて、他人に説明することができるようになることを到達目標とする。その際には、パワーポイントを用いたプレゼンテーション報告を重視する。

③授業計画

- 第1回 インTRODクシヨN
- 第2回 国際経営に関連するテーマの選定①
- 第3回 学生の発表①
- 第4回 振り返り
- 第5回 国際経営に関連するテーマの選定②
- 第6回 学生の発表②
- 第7回 振り返り
- 第8回 グローバル化と企業
- 第9回 グローバル化と地球環境
- 第10回 グローバル化と企業の社会的責任
- 第11回 グローバル化と関連するテーマの選定
- 第12回 学生の発表①
- 第13回 学生の発表②
- 第14回 振り返り
- 第15回 これまでの振り返り

④授業時間外の学習

講義開始までに、パワーポイントを使って、プレゼンテーション資料の作成を行う。

4. 本講義の概要

本研究授業における①問題意識、②研究授業の流れ、③学生への指導、④報告の位置づけ、そして、⑤学生の報告タイトルについて説明を行う。

①問題意識

4年生時の「卒業論文」の作成及び、4年生時の例年11月末から12月初頭に行われる「卒業論文中間発表」のテーマを考えるために、学生自身に興味のあるテーマを選ばせるとともに、それについて学生自ら文献やインターネットを用いて調べ、プレゼンテーション報告を行うこと目的とした。

本演習の担当者は、学生に「卒業論文」の作成に際しては、企業経営コースにおけるテーマを要求している。したがって、「企業」、「経営」、あるいは、「国際経営」に何ら関係のないテーマを卒業論文のテーマにすることはできない。

しかしながら、学生自身が興味のないテーマで「卒業論文」を作成することは、学生にとって非常に困難さを伴うことが予想される。そのため、学生自身の興味がある内容で且つ、「企業」、「経営」、そして、「国際経営」に関連するテーマを選ばせ、問題意識を持たせることが重要であると考えた²。

②研究授業の流れ

- 内容の説明
 - ・・・講義担当者がパワーポイントを用いて、研究授業の内容を説明した。
- プレゼンテーションの順番説明
 - ・・・講義担当者が学生のプレゼンテーション報告の順番と学生の発表概要について説明を行った。
- 学生の発表・質疑応答
 - ・・・学生の発表後、発表を行っていない4名が発表した学生に対して質問し、質問を受けた学生がそれに答えた。その後、研究授業参観教員にも質問を貰った。

- 振り返り

- ・・・今回、プレゼンテーション報告の準備を行い報告した感想と、今後の課題を学生に述べさせた。

- 学生へのコメント

- ・・・講義担当者が学生へのコメントを行うとともに、研究授業参観教員にもコメントをもらった。

③学生への指導

講義担当者は、本報告のプレゼンテーションの作成に対して、学生には「企業」、「経営」、そして、「国際経営」に関するテーマを選択させた。その上で、学生には問題意識を明確にするように指導を行った。

また、パワーポイントの作成に関しては、ゼミの時間に指導を行いながら、時間が不足している部分については、個別に時間を設けて、マンツーマンで指導を行った。

④報告の位置づけ

「卒業論文」に向けて、自らが問題意識を持つ内容で且つ、「企業」、「経営」、あるいは、「国際経営」の分野に関連するテーマを設定し、学生が報告を行う。来年からの就職活動に向けて、卒業論文のテーマを考えることができる。

⑤学生の報告タイトル³

第1発表者 「モーリーファンタジーの経営」

第2発表者 「ルイ・ヴィトンの戦略分析」

第3発表者 「ヤマハのステイクホルダー経営」

第4発表者 「ラ・ムーのSWOT分析」

第5発表者 「ドイツの経済体制」

5. 各報告者の報告内容及び学生への指導

本研究授業においては、繰り返し述べたように、4年生時に「卒業論文」を作成する学生に、問題意識を持たせるために指導を行い、本研究授業においてプレゼンテーション報

告を行わせた。

ここでは、5名の報告者の報告概要と報告者の問題意識に関して、説明を行うとともに、学生に対して行った指導内容を記載する。

第1報告者の報告概要・問題意識：

最初の報告者である第1報告者は、「モーリーファンタジーの経営」について報告を行った。この報告では、モーリーファンタジーが、どのような母体が経営を行っており、そして、展開を実施しているのかを明らかにされた。

この報告の問題意識は、以下のとおりである。このモーリーファンタジーの客層には特徴があり、主に、児童、その保護者、そして、高齢者などが多く訪れる。このような客層の特徴には、モーリーファンタジーの経営方針が関連しているのではないか、この点を明らかにしたいという問題意識であった。

第1報告者への指導内容：

第1報告者は、モーリーファンタジーの客層に興味（疑問）があったため、その興味をどのように報告に反映させるのか、という点を指導した。

第2報告者の報告概要・問題意識：

第2報告者は、「ルイ・ヴィトンの戦略分析」というタイトルで報告を行った。この報告においては、『ルイ・ヴィトンの法則 ―最強のブランド戦略―』に依拠して、ルイ・ヴィトンが自身のブランドをどのように高めているのかが報告された。

この報告の問題意識は、「中学生の頃、ルイ・ヴィトンを持っている人が多くいた」ということを出発点としており、若者が持つには高価なルイ・ヴィトンを購入するには、どのような動機があるのだろうか、そして、ルイ・ヴィトンにはどのような魅力があるのだろうか、という問題意識であった。

第2報告者への指導内容：

第2報告者には、自身の問題意識と企業の経営や戦略とをリンクして報告を行うように指導を行うとともに、ルイ・ヴィトンであれば、多くの文献が出版されているため、参考文献を活用しながら、自らの主張したい部分を報告に盛り込むように指導を行った。

第3報告者の報告概要・問題意識：

第3報告者は、「ヤマハのステイクホルダー経営」というタイトルで報告を行った。この報告においては、ヤマハの企業概要が説明されるとともに、ヤマハがどのようなステイクホルダーを重視しているのかが明らかにされた。

この報告の問題意識は、第3報告者が音楽や楽器に興味があることが基盤となり、地域貢献に力を入れているヤマハが、どのようなステイクホルダーを重視しているか、という問題意識であった。

第3報告者への指導内容：

第3報告者に対しては、ステイクホルダーとはどのような存在であり、企業に対してどのような影響力を行使できる存在であるのかを明らかにするように指導を行った。

第4報告者の報告概要・問題意識：

第4報告者は、「ラ・ムーのSWOT分析」というタイトルで報告を行った。この報告においては、ラ・ムーがどのような企業であり、そして、ラ・ムーには、どのような「強み」があるのかを明らかにするために、経営戦略論の講義で習った「SWOT分析」を用いて考察を行った。

この報告の問題意識は、「なぜラ・ムーには、客が多いのだろう」と考え、「ラ・ムーには、いったいどのような強みがあるのか」を明らかにしたいというものであった。

第4報告者への指導内容：

第4報告者は、ラ・ムーの「強み」について興味があったため、近隣の同業他社との違いを「SWOT分析」において際立たせることを指導した。

第5報告者の報告概要・問題意識：

最終報告である第5報告者は、「ドイツの経済体制」というタイトルで報告を行い、現在のドイツにおける経済事情を踏まえ、とりわけ、ドイツの自動車産業に焦点を当て、今後、展開が期待される第4次産業革命（通称：インダストリー4.0）について報告を行った。

この報告の問題意識は、「社会人になるから車が必要である」ことを基軸とし、どのような車が日本で人気であるかを調べたところ、人気の輸入車の大半がドイツ車（例えば、

VWやその傘下のAudi、Porsche、あるいは、DaimlerやBMW) などであった。このことから、何故、ドイツの自動車産業が強いのかについて明らかにするというものであった。

第5 報告者への指導内容：

第5 報告者への指導としては、問題意識が明確であったが非常に大きなテーマであったために、如何にして、文献を集めながら、テーマに沿った形で報告を行うのかについて指導を行った。

6. 学生による振り返り

学生の報告及び質疑応答後、学生自身に、この報告を行った感想及び、今後の課題について振り返りを行わせた。

学生たちによれば、「卒業論文」に向けて、この時期から自分の興味のあるテーマで報告を行い、お互いの内容について質疑応答をし合うことによって、意識を高めていくことは非常に良い経験になったとの意見が出された。

7. 検討会の内容

研究授業終了後の検討会においては、以下の点について議論が行われた。①本研究授業の良かった点、②改善が必要な点、そして、③研究授業に関連した今後の検討点についてである。

① 研究授業の良かった点

- 学生に対してゼミのテーマと関連して、興味のある内容を報告させることは、翌年の卒業論文の指導に向けて意義がある。
- 学生のパワーポイントを用いたプレゼンテーション報告の指導が行えていた。
- 学生の報告内容が多様であり、それぞれの問題意識に沿った指導が行われている。

② 研究授業の改善点

- 学生のプレゼンテーション報告に焦点が当たりすぎており、担当教員による学生への指導プロセスが見えにくい。
- 学生に対して、問題意識だけではなく、何を明らかにしたいのかと、何を明らかにしたのかについてより指導を行う必要がある。
- 学生の問題意識は明確であったが、結論との関係性が不十分な点があり、この点も講義担当者が学生に指導を行う必要がある。
- 学生のプレゼンテーション報告においては、企業のデータ等を用いて、数量的なデータを見せる指導を行ったほうが良い。

③ 研究授業に関連した今後の検討点

- 3年生のゼミ生に対しては、卒業論文に向けて基礎的な内容をゼミで取り扱うのか、問題意識を持たせるのか。
- 本研究授業で学生が発表したテーマで、そのまま「卒業論文」のテーマとして作成させるのか。

研究授業後の検討会においては、以上のような意見が出された。③については、次節のまとめについて検討を行う。

8. まとめ

今回の研究授業においては、「演習Ⅳ」の学生に「卒業論文」に向けた問題意識を持たせるため、学生にパワーポイントを用いて、学生自らが興味のあるテーマに沿って、プレゼンテーション報告を行わせた。

検討会でも指摘が行われたが、筆者は研究授業を行うのが初めてであったため、「演習Ⅳ」において学生を指導した成果を見せることにこだわり過ぎ、担当教員による学生への指導を見せることができなかったことは非常に残念であった。また、問題意識が明確であったとしても、考察の結果とのリンクが不十分であったことは、指導において不十分な点であり、今後の課題としたい。

しかしながら、学生に「企業」、「経営」、そして、「国際経営」に関連するテーマで、問

題意識を持たせて、報告を行わせ、「卒業論文」に向けて弾みをつけさせたことは非常に意義があったと考える。

また、今後の検討点においても言及したように、3年生のゼミ生に対しては、「卒業論文」に向けて基礎的な内容をゼミで取り扱うのか、問題意識を持たせるのか、という課題を考えながら、今後も講義の運営を行っていきたい。

学生報告の参考文献：

尾木蔵人 [2015], 『決定版 インダストリー4.0 第4次産業革命の全貌』 東洋経済。

中西隆夫 [2013], 『トヨタ対VW 2020年の覇者をめざす最強企業』 日本経済新聞出版社。

長沢伸也編著 [2007], 『ルイ・ヴィトンの法則 ―最強のブランド戦略―』 東洋経済新報社。

¹ 高松大学のシラバスを一部修正。

² 学生に問題意識を持たせる時期については、後述のように、検討会でも議論が行われた。

³ 本稿においては、学生名は省略する。

研究授業の資料（一部を抜粋）：

平成27年12月4日(金) V 限

研究授業 「演習Ⅳ」

高松大学経営学部経営学科
講師 岡本丈彦

1

研究授業の流れ

- 内容の説明
- プレゼンの順番の説明
- 学生の発表・質疑応答
- 振り返り
- 学生へのコメント

2

研究授業の内容

- 学生それぞれがテーマを選択し、10分程度発表を行い、それに対して、3分程度の質疑を行う。
- 出席した教員より質問を頂く。
⇒ その際に、岡本が司会をする。

3

学生への指導

- 学生には、「企業」、「経営」、そして、「国際経営」に関するテーマを選択させた。
- 学生には、問題意識を明確にするように、指導を行った。

4

報告の位置づけ

- 卒業論文に向けて、自らが問題意識を持つ内容で且つ、「企業」、「経営」、あるいは、「国際経営」の分野に関連するテーマを設定し、学生が報告を行う。
- 来年からの就職活動に向けて、卒業論文のテーマを考えることができる。

5

学生による質疑応答

- 報告を行った学生に対して、4名の学生が質問を行う。
- 報告内容に関する質問及び、疑問点について質問してください。

12

振り返り

- 今回、プレゼンテーション報告の準備を行い、報告した感想と、今後の課題をそれぞれ述べてください。

27

